

人妻 弥英子

～嗚咽の浣腸接待～

◆登場人物

・ みさきやえこ
三崎弥英子

やくざに仕込まれた美しき人妻

元は中学の女教師

・ ちやうよんじゅ
張肆儒

中国マフィアで麻薬のバイヤーを生業としている

女の肛門にしか興味を示さない変態サディスト

・ くろさきたとし
黒崎忠利

広域指定暴力団で、麻薬と人身売買を生業としている

女を痛めつけることが趣味

・ にしむらこうき
西村弘毅

黒崎の舎弟で、いつも黒崎に連いて回っている

・ みさきあきひこ
三崎明彦

弥英子の夫だが、黒崎の組に捕らわれている

◆もくじ

1. 囚われの人妻 尻注射の苦悶
2. 悶絶大腸スコープ
3. 赤いイルリガートル
4. 火に炙られる女体
5. 尻ねだりと連続浣腸
6. 白い簞のなかでの凌辱
7. 凌辱の渦

囚われの人妻 尻注射の苦悶

ヤクザの組の息がかかった高級料亭。

ここでは弥英子という名の美しい人妻が、夫、子供までも人質に取られ、止む無く売春婦として働いていた。

客は肛虐を趣味とする変質家や、糞尿愛好家。^{スカトロジスト}

この世のものとは思えぬ残忍な責めを、弥英子は受け止めていく……。

さああ……。

秋の薫風を切りながら黒塗りのベンツが繁華街を走る。

麻薬の取引を終えたヤクザの黒崎は、取引相手である中国マフィアの張を接待する為の高級料亭へ向かっていた。

「ここらであんたに世話する極上の女に会わせるぜ。楽しみだったはずだ。」

「今からか。……どんな女か気になってたよ。

わたしは日本の女が大好きね」

ヤクザの用意する女だ、なかなかの女だろう。

張は膨らむ期待で顔が歪み、気持ちの悪い笑みを浮かべている。

「フッフ、いい女だぜ。張さん好みのいい尻をした子持ちの人妻でね。……元は中学だったか、女教師をやっていたんだ」

黒崎は張に説明しながら車を走らせる。

ヤクザの事だ、どこぞで誘拐をしてきたか、借金のカタに嵌めた女だろう……。

黒崎たちの組が裏ビデオや売春、人身売買と手広くやっていることも張は知っていた。

「三崎弥英子という女でね。張さんのような肛門好きな客相手に接待をさせているんだが、毎晩客の指名が多く入るもんで、会わせるのも一苦勞だったんだぜ」

「……そんなに評判の女か」

「会ってみりゃわかりますぜ。

日に日に色気が増していて、今じゃ圧倒されます」

「……ほう、ほう」

車は繁華街を抜け、一角にある高級料亭へ入った。夜遅いこととあってか、女中が一人出迎えただけであった。

女中は黒崎が来ることを知っていたらしく、何も言わず先だって案内をはじめる。ここはどうやら組の息がかかった料亭らしい。

日本庭園の池の上をまたぐ渡り廊下を通ると、離れの座敷へ案内された。入り口に板前のような格好の男が二人立っていたが、襟元からのぞく入墨など、どうもガラが悪く明らかにヤクザだ。

「お控えなすって、黒崎の兄い」

「お控えなすって」

男達は黒崎に近寄り、恭しく礼をした。

「三崎弥英子はどうだ」

「へえ、なかに控えさせておりやす」

離れの中へ入ると、赤いドレス姿の女が居た。

この女性が三崎弥英子だ。

……なるほど、思わず胸震いするほどの美人だ。

元もいいのだろうがヤクザからの調教で徹底して磨き上げられたのであろう、洗練された美しさがあった。



「三崎弥英子です。

本日は、張さんにお会いできて光栄ですわ」

挨拶を済ませると、三つ指をついて土下座をする弥英子。深紅のドレスに、白いバラ。畳に落ちる長い黒髪に、白い肌が対照的で眩いばかりだ。

「夜はこれからです。

煮るなり焼くなり、張さんの好きなように飽きるまで責めてやってください」

「わはは……ほう、ほう、ほう」

奥の座席には贅を尽くした日本料理、日本酒も用意されている。

「太客だ、しっかりと^{ねぎら} 勞えよ。何されても笑顔だ、いいな」

黒崎は、張に酌をするよう命じて離れを後にした。

「——それでは、張さん、お隣失礼しますわ」

張に寄り添い、酌をする弥英子

「いい女だな、あんた。ほほ、胴震いがするヨ」

張はドレスの美しいラインを目でなぞりながら
注がれた日本酒をグイッとあおった。

「次は、口移しで吞ます、いいか」

弥英子は「失礼いたします」と言って日本酒を口に含むと、ねっとりと深いキスをするよう張の口に移す。

「ひひ、よく仕込まれてる」

これに興奮した張は弥英子の尻に手をまわした。

「あ……あむ……。

あなた、お浣腸をするのでしょうか」

「ああ、ワタシ、美女に^{エネマ} 浣腸してやる、何よりも好き」

「……弥英子も、あなたにお浣腸されたいわ」

これも仕込まれた媚態であろう、恥じらいに弥英子の頬が赤く染まり官能的だ。

「弥英子、^{エネマ}浣腸され、どんな声で悶え苦しむか。どうヒリ出して恥辱に喘ぐか」

「うふふ、ご期待に添えればよろしいのですが……」

その後、奥のフスマから弥英子が浣腸の道具を取り出しはじめた。

- ・ 大小さまざまなパイプ、ディルドゥ
- ・ ディスポーザブル浣腸
- ・ イルリガートル浣腸器
- ・ エネマシリンジ
- ・ メモリが三千CC までもある、ガラス製の巨大な注射型浣腸器

その他、ピーカーやグリセリン原液の薬瓶などが、テーブルの上に並べられていく。

「まだ奥にあるな。出してみるいい。……ほう、ドナン液にバリウムもあるか。では私の特製ブレンドくれてやる。腹にズンと響き、たまらないはずよ、ほっほ！」



弥英子は張に言われるまま、浣腸マニアしか使わない、猛烈な効果を及ぼす薬瓶も怖ず怖ずと並べる。

「……楽しみにしておりますわ」

言葉とは裏腹に、薬瓶を置く手が震えていた。

「これだけ強い薬あると、さすがに怖いか」

張は幾つかの薬瓶を手に取り、ニヤけながら選別をする。手に取った浣腸薬の薬効を畏怖する弥英子の顔をのぞきながら。

——作るものが決まったのか「ようし……！」と上擦った声を出すと、洗面器に薬瓶を開け、グリセリン原液と酢酸、バリウムを混合した浣腸液を作った。

(うう……ッ！)

たちまち鼻孔を突く猛烈な匂いが充満する。

「どうした弥英子、はやく尻を向けるのことよ」

(……………)

張は震える弥英子の尻を眺めながら、注射型の浣腸器に薬液を充填していく。

「浣腸はどこにされる。

尻を向けたなら、パンティーをめくって見せるいいね」

「ああ……、お……お手柔らかにお願い致しますわ」

消え入るような声で悲願すると、怖ず怖ずとドレスをすべらし、パンティーをめくりあげていく。

「いい尻してる。むしゃぶりつきたくなるほどね。

ほっほ、尻たぶひろげて肛門晒すのことよ、いいか」

「は、はい……」

自ら臀部を割開くと、恐怖にヒクヒクとおののく弥英子の肛門があらわになった。

「そうだ、今日はそこを、
こってりと締め上げてやる。覚悟することね」

そう言うとともに肛門に手をのばし、中指の腹でクニクニと揉みはじめた。

「あ……あうっく」

吸い付くような感触と、ふっくらとした柔らかさをみせる肛門に欲情がたぎる。

「いい感触だ。どれ、尻をくねらしながら、気分を出してみろ」

「は……はいい。う……あむむむ。」

この後もワセリンまで塗り、
弥英子の肛門を執拗にこねくりまわした。

「あ……あふ……ッ！そんな奥まで……ッ！」

弥英子も肛門が蕩けるような甘美感で、腰が痺れ、秘所が蜜に濡れた。

「——よし、^{エネマ}浣腸だ」

弥英子はビクッ肩を震わせると、覚悟を決めたように固く目を瞑り、仰向けの大股開きになった。

「肛門に挿しやすいようにもたげてくれ、ホホ」

「ああ、失礼しました」と消えそうな声で言ってから、クイッと尻を浮かせた。



——この続きは製品版にてお楽しみください。